鳥居松遺跡6次

2009

(財)浜松市文化振興財団

例　言

1　本書は、静岡県浜松市中区森田町における鳥居松遺跡の発掘調査報告書である。
2　発掘調査は、住宅地造成工事に先立ち実施した。発掘調査は遠州鉄道株式会社の委託により、浜松市教育委員会の指導(浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当が補助執行)のもと、財団法人浜松市文化振興財団が実施した。調査にかかわる費用は全額遠州鉄道株式会社が負担した。
3　発掘調査にかかわる委託期間は、平成20年10月20日～平成21年3月25日である。
4　現地調査及び整理作業は、井口智博(浜松市生涯学習課文化財担当)が担当し、清水香枝(浜松市文化振興財団)が補佐した。
5　本書の執筆及び編集、写真撮影は井口が行った。
6　調査にかかわる諸記録及び出土遺物は浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当が保管している。
7　本書で用いる座標値は、世界測地系を用いた。レベル高は標高である。
8　土層・土器の色調は、『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議局監修）に準拠した。

目　次

第1章　序　論
1　調査に至る経緯 ……1
2　鳥居松遺跡をめぐる環境 ……2

第2章　調査成果
1　検出遺構 ……5
2　出土遺物 ……7

第3章　総　括 ……9

図　版
報告書抄録

第1章　序　論

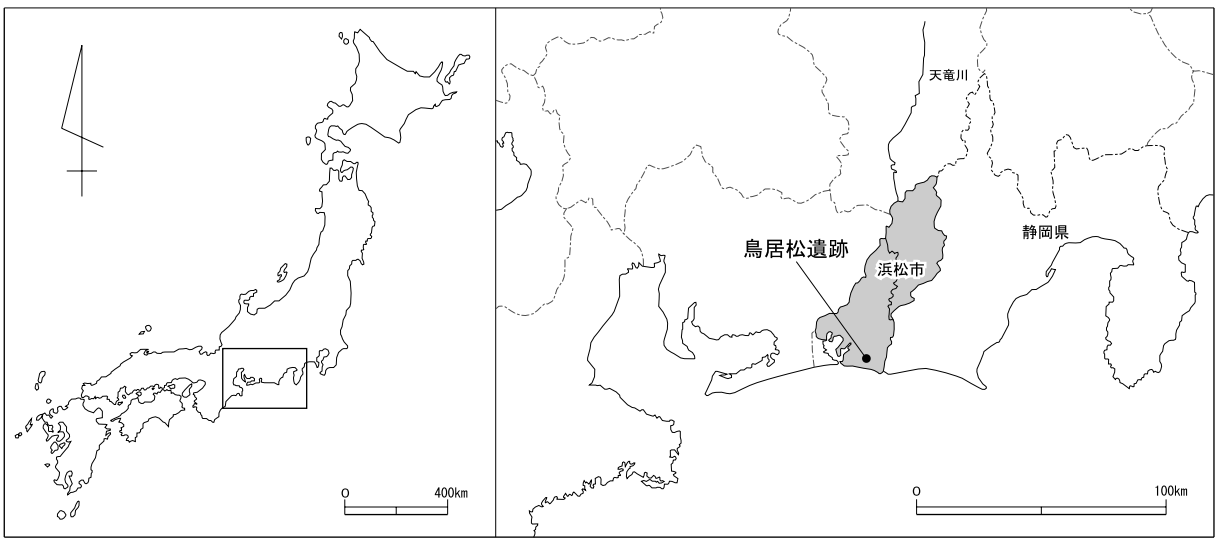
1　調査に至る経緯

鳥居松遺跡は浜松市南部の平野上に位置する。遺跡として認識されたのは 1995 年のことであり、発掘調査が行われるようになったのは比較的最近である。これまでの発掘調査により、弥生時代後期の遺構と遺物が高密度で分布していることが明らかとなっており、この時代に集落が営まれていたと考えられている。特に第 3 次調査において出土した家形土器は、全国的にみても出土例が少なく注目できる遺物である。

また、古墳時代から平安時代にかけての自然流路の跡である伊場大溝が鳥居松遺跡に及んでいることが明らかになっている。伊場大溝は伊場遺跡から南東方向に流れ、鳥居松遺跡付近で大きく蛇行し、南西方向に向きを変えている。このことから、今日では鳥居松遺跡も伊場遺跡群を構成する遺跡の一つとして認識されている。

今回の調査対象地では、北側に集合住宅の建設が、南側に宅地造成が計画され、これらに伴う埋蔵文化財の発掘調査が 2008 年 1 月から 6 月にかけて実施された(第 5 次調査)。ところが、その後北側の集合住宅建設計画は中止となり、この部分についても住宅地として造成する計画に変更された。この計画では、敷地の東西方向に市道移管予定の道路が設置されることになっており、新たに埋蔵文化財の発掘調査の必要が生じた。道路の大半は、集合住宅建設予定地として調査済みであったが、東側の市道との接続部付近が未調査のままとなっていたため、この部分について発掘調査を実施することになった。

発掘調査は、浜松市教育委員会の指導（浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当が補助執行）のもと、財団法人浜松市文化振興財団が実施した。現地調査は 2008 年 12 月 1 日から 12 月 9 日にかけて約 41 ㎡を対象に行った。



第 1 図　鳥居松遺跡の位置

2　鳥居松遺跡をめぐる環境

地理的環境　鳥居松遺跡を含めた伊場遺跡群（伊場・城山・梶子・梶子北・中村・九反田・畷東）は浜松市南部地域の海岸平野上に位置する。この平野には現在の中田島砂丘を含めて、東西方向に延びる 8 条の砂丘列が確認されている。これらの砂丘と砂丘の間には湿地帯（砂堤列間低地）が広がっている。

鳥居松遺跡はこれらの砂丘上ではなく、近傍を流れる馬込川が形成した扇状地上に位置すると考えられている。この扇状地がいつの時点で形成されたかは明らかではないが、少なくとも弥生時代後期までには安定した微高地が形成されていたと推定できる。この時期には砂堤列間低地においても集落が営まれており、海岸平野上の広い範囲で生活の場に適した微高地が存在したと考えられる。また、微高地の周囲の低地は水田として利用されていたと思われる。

古墳時代に入ると伊場遺跡群の周辺は厚い粘土の堆積で覆われ、再び生活の痕跡が見出せるのは古墳時代後期以降である。しかしながら、平安時代中頃遺構は再び湿地化し、人々の活動は低調になる。これには度重なる天竜川の洪水と、海面上昇が深く関わっているものと推定できる。海岸平野における生活環境は、自然的な要因に大きく左右されていたと言える。

歴史的環境　鳥居松遺跡においては現在までのところ、縄文時代以前の遺構や遺物は確認できていない。周辺の遺跡では、梶子北遺跡と中村遺跡において前期末から中期初頭の礫群とともに石器や土器が出土している。

弥生時代になると、海岸平野上において本格的な集落が営まれるようになる。特に中期以降は遺構や遺物の出土例が急激に数を増し、梶子北遺跡及び中村遺跡の調査では、三方原台地直下の砂丘上に数多くの方形周溝墓が検出されている。後期には伊場遺跡に三重の環濠をもつ集落が造営された他、梶子遺跡でも広い範囲に集落が展開していたことが判明しており、当地域における中核的な集落跡と位置づけられている。鳥居松遺跡においても、これまでの調査結果から環濠を伴う集落の存在が確認されている。また、集落の周囲には水田が広がっていたと考えられ、第 3 次調査では大畦畔の傍らから家型土器が出土している。

古墳時代前期には伊場遺跡群周辺の集落は急速に衰退し、梶子北遺跡において僅かに遺構と遺物が検出されているに過ぎない。弥生時代の末期からこの時期にかけて粘土の堆積が進んでいることから、度重なる洪水により集落が放棄されていたと考えられる。中期には再び生活の痕跡が見出せるようになり、後期なると城山遺跡や梶子遺跡、中村遺跡に竪穴住居や掘立柱建物で構成された集落が営まれている。

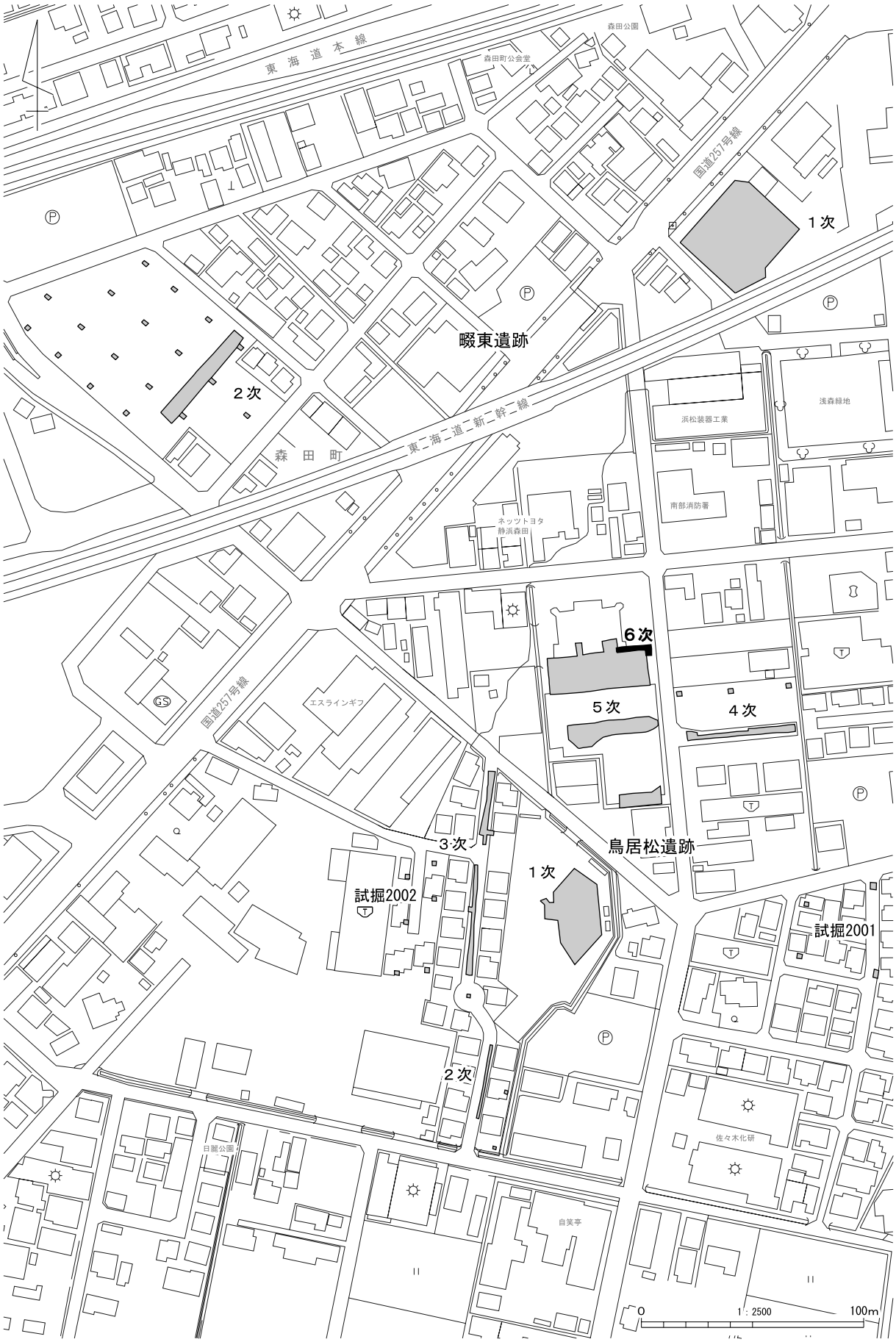
奈良時代には伊場遺跡とその周辺の砂丘上に掘立柱建物群が出現する。また、遺跡を分断するように流れる伊場大溝と呼ばれる自然流路の跡が確認されている。伊場大溝からは木簡や墨書土器などの古代文字資料が豊富に出土し、その内容から厨や軍団などの郡衙関連施設が付近に存在したと考えられている。また、梶子北遺跡では整然と配置された建物群が発見されており、郡衙政庁又は館の可能性が指摘されている。これらの発掘調査結果により、一帯には古代敷智郡の郡衙中枢施設が置かれていたと考えられている。

1	鳥居松遺跡	8	城山遺跡	15	入野古墳	22	東野宮遺跡	29	堤町村東遺跡
2	暾東遺跡	9	神田遺跡	16	八反田遺跡	23	若林町村西遺跡	30	新橋町村東遺跡
3	九反田遺跡	10	高柳遺跡	17	井村遺跡	24	東若林遺跡	31	田尻古墳群
4	伊場遺跡	11	浅間遺跡	18	増楽町村北遺跡	25	村裏遺跡		
5	梶子遺跡	12	戌新畑Ⅰ遺跡	19	高塚遺跡	26	村東遺跡		
6	中村遺跡	13	戌新畑Ⅱ遺跡	20	高塚町村中遺跡	27	瓦塚遺跡		
7	梶子北遺跡	14	下山田遺跡	21	増楽遺跡	28	旧大通院境内遺跡		

第２図　鳥居松遺跡周辺の遺跡分布

表１　鳥居松遺跡における発掘調査一覧

次数	調査期間	調査面積	主な時代	文献
1次	1995.12～1996.2	700㎡	弥生・平安	(財)浜松市文化協会　1997　『鳥居松遺跡』
2次	2000.4	35㎡	弥生・奈良	(財)浜松市文化協会　2000　『鳥居松遺跡2』
3次	2002.1	172㎡	弥生・奈良	(財)浜松市文化協会　2002　『鳥居松遺跡 -3次調査-』
4次	2003.6	122㎡	弥生・奈良	(財)浜松市文化協会　2003　『鳥居松遺跡 -4次調査-』
5次	2008.1～2008.6	1200㎡	弥生・奈良	資料整理中
6次	**2008.12**	**41㎡**	**弥生**	**本報告書**



第3図　鳥居松遺跡調査区配置図

第 2 章　調査内容

1　検出遺構

基本層位　調査区壁面における土層観察結果を第 5 図に示した。対象地は全面に渡って山土による盛土が行われており、厚さは 0.8m程であった。盛土の直下には旧水田耕作層である黒灰色粘土（1 層）が堆積していた。その下には青灰色粘土（2 層）の堆積があり、水田床土に相当すると考えられる。過去の調査では水田床土の直下で古墳時代から奈良・平安時代の遺構と遺物を検出している。そのため、今回の調査でも遺構の検出を試みたが、僅かな土器片が出土したのみで遺構を確認することはできなかった。

3 層から 6 層までは弥生時代後期の遺物包含層である。褐色ないし灰色の粘土層であり、第 5 次調査では、弥生時代の遺構検出面を上層・中層・下層の 3 面に分離している。そのため、今回の調査においてもこの見解に従って調査を行った。具体的には上層は 4 層の上面、中層は 5 層の上面、下層は 7 層の上面を遺構検出面とした。また、調査区の西側において土層が異なる箇所があり、A層からD層に分離した。7 層は黒色粘土の薄い堆積層であり、土層図には明示していないが直下には灰白色粘土が、その下には黒色泥炭質粘土の堆積が広がっていた。この層位関係は鳥居松遺跡周辺の他、伊場遺跡群の各遺跡でもほぼ共通した堆積が認められる。

弥生時代の水田　弥生時代の遺構面を上層・中層・下層の 3 面に分離して調査を行った。

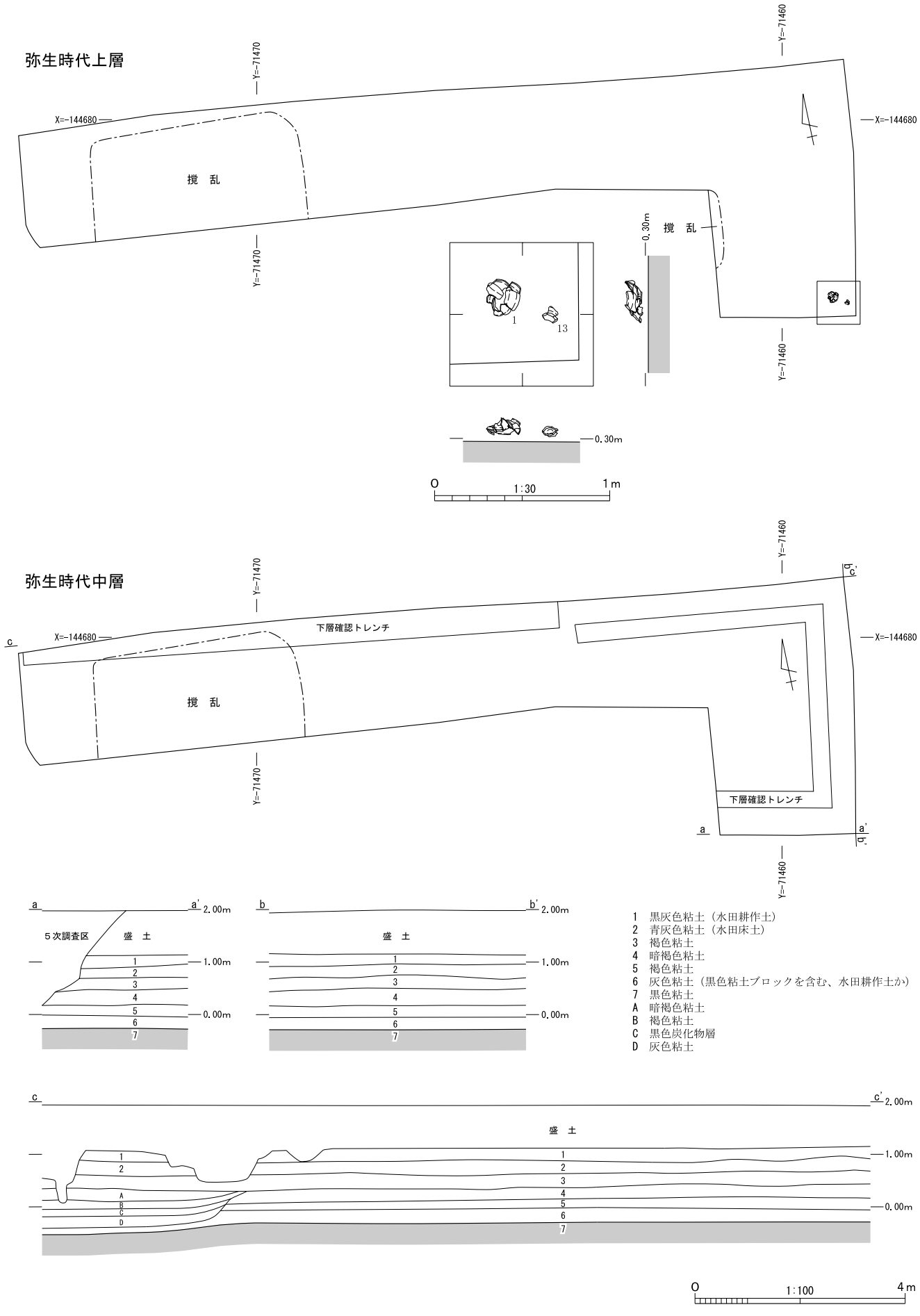
上層では明確な遺構を検出することができなかった。調査区の南東隅から比較的遺存状態の良い土器が出土している。周囲を精査し土層断面も観察したが、遺構に伴うものか否かは確認できなかった。但し、過去の調査事例から水田畦畔の中に含まれていた可能性も考えられる。遺物は弥生土器が出土しているが、多くは破片であり完形のものは無かった。

中層以下は湧水が激しく、短時間で表面に耐水してしまうことから遺構の検出はほぼ不可能であった。土層断面を観察しながら遺構の検出を試みたが、明確な遺構を確認することはできなかった。

下層の調査は湧水がさらに激しくなり遺物も希薄であったことから、全面的には調査せずトレンチを設定して遺構面である 7 層までの深さを確認するに留めた。

これらの調査結果から、平面、断面ともに明確な遺構が認められないこと、各遺構検出面の境が耕作によると思われる撹拌を受けていること、遺物の出土が他の地点と比較して極端に少ないことから、水田として利用されていた可能性が高いと考えられる。

第 4 図　土器出土状態



第５図　調査区全体図及び土層断面図

2　出土遺物

概要　今回の調査における出土遺物を第 6 図に示した。盛土直下の旧水田耕作土及び床土から須恵器と灰釉陶器の破片が出土したが、いずれも小破片であるため図示することはできなかった。図示できたのは、15 の砥石を除き全て弥生土器である。土器の遺存状態はいずれも悪く、完全な形のものは皆無であった。

弥生時代の遺物　上層からの出土遺物を 1 ～15 に示した。1 は小型の壷である。口縁部は失われていたものの、胴部はほぼ全体が残っていた。表面には横方向のミガキ調整が施されている。2 はやや大型の壷の頸部である。口縁の先端は失われていたが、折返口縁の壷であったと推測できる。頸部の表面は粗いハケ調整が施され、部と胴部の接合部分には有段羽状の刺突文が廻る。形態的な特徴は天竜川以東の菊川様式の影響を強く受けた土器と言えるが、胎土から天竜川平野において製作されたものと考えられる。3 ～ 6 はいずれも壷の底部である。4 の底部には穀物痕が、6 の底部には木葉痕が認められる。

7 は直立口縁の鉢である。表面は摩滅が著しく、調整は確認できなかった。8 は鉢の口縁部である。口縁先端はヨコナデされ、表面は縦方向のミガキ調整が施されている。形状から片口鉢の可能性が考えられる。9 と 10 は甕の口縁部であり、いずれも先端には刺突が認められる。また、9 の口縁はハケ調整ののちにヨコナデが施されている。11～14 は高坏である。11 と 12 の坏部は口縁が外反した形状であり、山中様式系統の特徴を備えている。11 の表面には波状文が施されている。これに対し、14 の脚部は内湾した形状であり、欠山様式系統の特徴をもつ。15 は軽石製の砥石である。

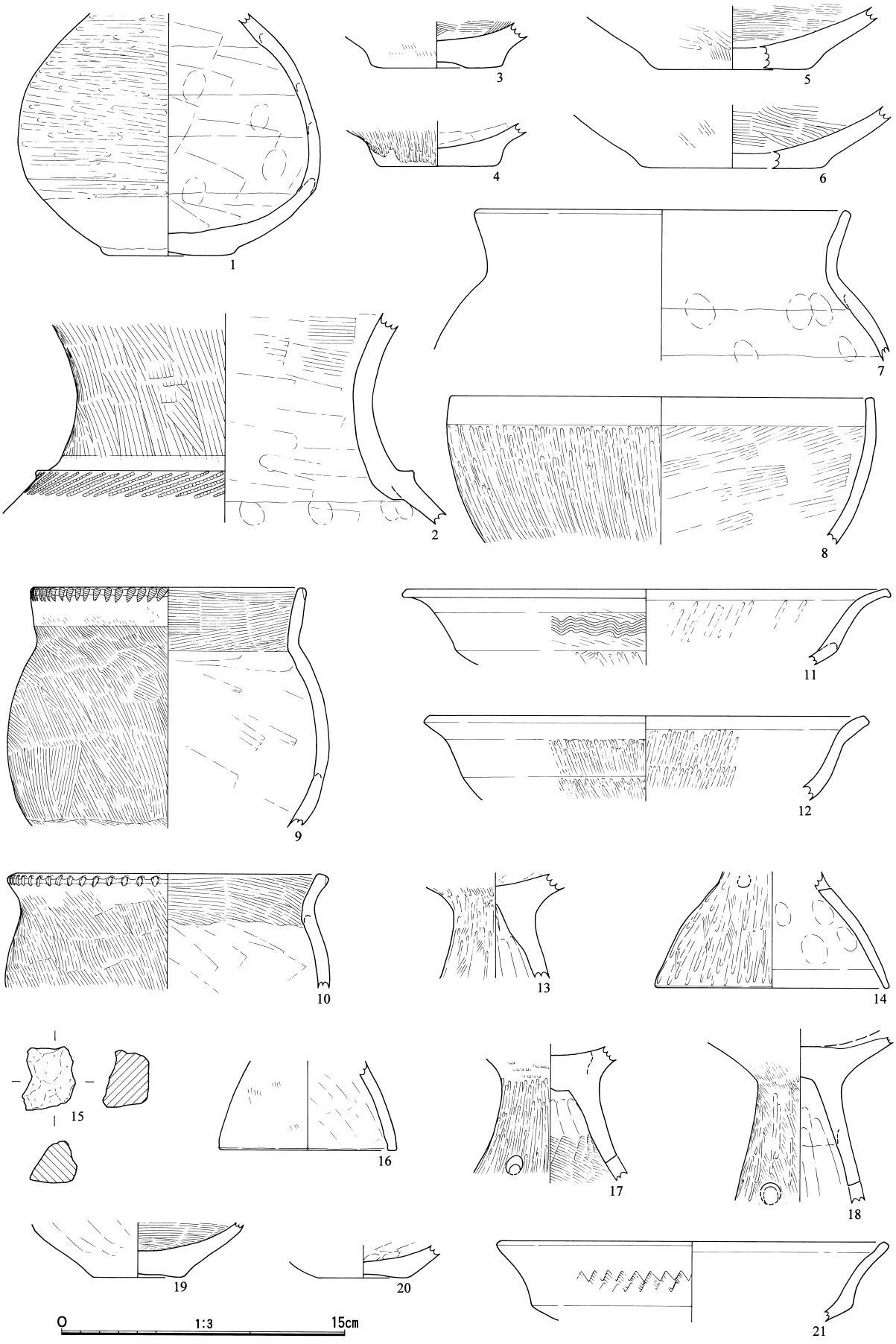
中層からは 16～18 の遺物が出土した。16 は甕の脚台部である。17 と 18 は高坏の脚部である。いずれも 3 方向にスカシ孔が空けられている。

下層からは 19～21 の遺物が出土した。19 は壷の底部である。20 は小型の壷ないし鉢の底部と考えられる。21 は山中様式系統の高坏である。坏部の破片で、表面には波状文が施されている。

これらの弥生土器から推定できる層位の時期は、やや決め手に欠ける部分があるが、上層が後期後半の欠山様式段階、下層が後期前半の山中様式段階に相当すると考えられる。

表 2　出土遺物観察表

図版	番号	取上番号	遺構・層位	種別	細別	残存率%	反転	器径cm	器高cm	口径cm	底径cm	色調	その他
6	1	6	上層	弥生土器	壷	60		16.0			7.0	にぶい橙色	
6	2	3/4/9	上層	弥生土器	壷	10	反					灰白色	
6	3	3	上層	弥生土器	壷	10	反				7.0	灰白色	
6	4	4	上層	弥生土器	壷	10	反				7.0	淡灰橙色	底部穀物痕
6	5	3	上層	弥生土器	壷	10	反				9.0	灰白色	
6	6	3	上層	弥生土器	壷	10	反				10.0	淡橙灰色	底部木葉痕
6	7	4	上層	弥生土器	鉢	10	反			20.0		灰白色	
6	8	4	上層	弥生土器	片口鉢？	10	反	22.8		22.4		灰白色	
6	9	4	上層	弥生土器	甕	20	反	17.0		14.6		灰褐色	
6	10	4	上層	弥生土器	甕	10	反			17.0		茶灰色	
6	11	4	上層	弥生土器	高坏	10	反	26.0				淡灰黄色	
6	12	4	上層	弥生土器	高坏	10	反	23.6				灰白色	
6	13	5	上層	弥生土器	高坏	20	反					灰黄茶色	
6	14	4	上層	弥生土器	高坏	20					13.0	灰白色	スカシ3方向
6	15	3	上層	石器	砥石								軽石
6	16	10	中層	弥生土器	甕	10	反				9.4	淡灰褐色	
6	17	8	中層	弥生土器	高坏	30	反					淡橙色	スカシ3方向
6	18	7	中層	弥生土器	高坏	20	反					灰茶色	スカシ3方向
6	19	9	下層	弥生土器	壷	10	反				5.0	灰白色	
6	20	9	下層	弥生土器	壷	10					4.6	淡赤橙色	
6	21	13	下層	弥生土器	高坏	10	反	20.8				淡橙色	



第 6 図　出土遺物

第3章　総　括

今回の鳥居松遺跡の発掘調査は、調査面積も期間も限られたものであったが、弥生時代後期における土地利用の状況が明らかになったと言える。以下に今回の調査における成果と、過去の調査結果から導き出された知見をまとめ総括としたい。

弥生時代の成果　今回の調査では、建物跡などの目立った遺構は確認できなかった。また、出土した土器も遺存状態が悪く、完形のものは皆無であり、鳥居松遺跡の中では遺構・遺物ともに希薄な地点であると言える。これらの調査結果から、当該地点は弥生時代後期に水田として利用されていたと考えられる。

集落と水田　鳥居松遺跡では、第1次調査において弥生時代後期の環濠を伴う集落跡を検出している。場所は今回の調査地点から南に 100m程離れた地点であり、この周辺が集落の中心と考えられる。しかしながら、さらに南に位置する第2次調査地点から環濠に相当すると思われる溝を検出しており、集落の末端がさらに南に延びる可能性が残される。家形土器は集落の西側の大畦畔の傍らから、完形の土器とともに出土している。出土地点の周辺は水田として利用されていたと考えられ、稲作に伴う祭祀に利用されたものと推測される。

同一敷地内では、先行して第5次調査が行われ、調査区のほぼ全面において夥しい量の弥生時代後期の遺物が出土している。現在資料整理中であるため詳細については今後の報告を待ちたいが、集落と水田の境界に当たる部分を検出している。今回の調査地点は位置関係からみて、水田部分の一端に該当すると言える。

畷東遺跡との関連　鳥居松遺跡の北側に位置する畷東遺跡では、これまでの発掘調査において弥生時代後期の遺構と遺物が確認されている。また、近傍に位置する浜松市南消防署の敷地内からは、井戸の掘削中に弥生土器が発見されていることから、今日においては鳥居松遺跡と一連の遺跡と認識されている。畷東遺跡においては、現在までのところ集落の中心部分が明らかになっておらず、鳥居松遺跡の集落との関連を含めて今後の検討課題と言える。

参考文献

加納俊介・石黒立人編　2002　『弥生土器の様式と編年　東海編』　木耳社

浜松市教育委員会　2008　『伊場遺跡総括編』

(財)浜松市文化協会　1991　『梶子遺跡Ⅷ』

(財)浜松市文化協会　1991　『浜松市畷東遺跡発掘調査報告書』

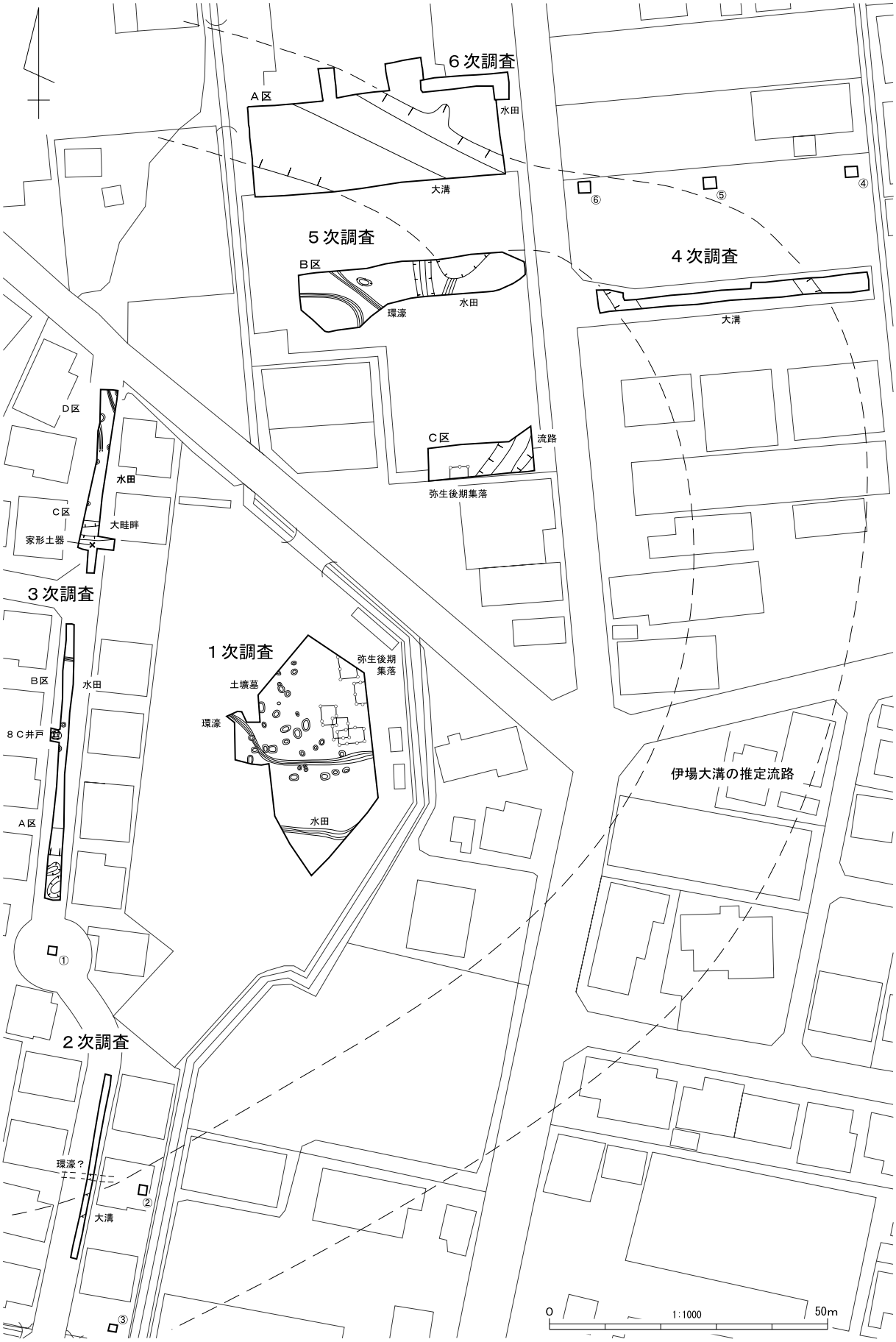
(財)浜松市文化協会　1998　『梶子北遺跡』

(財)浜松市文化協会　2000　『山の神遺跡5次』

(財)浜松市文化協会　2003　『畷東遺跡 － 2次調査－』

(財)浜松市文化協会　2005　『中村遺跡(南伊場地区) －本文編－』

(財)浜松市文化振興財団　2008　『東原遺跡 33 次』



第７図　鳥居松遺跡全体図

図版1

1　東半弥生上層全景（北西から）

2　東半弥生上層全景（南西から）

1　東半弥生中層全景（北西から）

2　東半弥生下層確認状況（北西から）

図版3

1　西半弥生上層全景（南東から）

2　西半弥生中層全景（南東から）

1

2

7

9

10

13

17

18

報　告　書　抄　録

書名(ふりがな)	鳥居松遺跡６次　(とりいまついせき６じ)
編著者名	井口智博
編集機関	浜松市教育委員会 〒430-0917　浜松市中区中央1-2-1　イーステージ浜松オフィス棟 浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当(浜松市教育委員会の補助執行機関) 〒430-0946　浜松市中区元城町103-2 TEL(053)457-2466　FAX(053)457-2563
発行機関	財団法人　浜松市文化振興財団 〒430-7790　浜松市中区板屋町111-1 TEL(053)451-1151　FAX(053)451-1123
発行年月日	平成 21 年 3 月 25 日

遺跡名(ふりがな)	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積(㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
鳥居松遺跡(とりいまついせき)	静岡県 浜松市 中区 森田町	22202	1-04-28	34 度 41 分 36 秒	137 度 43 分 12 秒	2008 年 12 月	約 41 ㎡	宅地造成に先立つ埋蔵文化財発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鳥居松遺跡	水田	弥生時代後期	包含層・水田	弥生土器	
		古墳時代後期～ 平安時代	包含層	土師器・須恵器 ・灰釉陶器	

鳥居松遺跡６次

平成 21 年 3 月 25 日発行

編集機関　浜松市教育委員会
発行機関　財団法人　浜松市文化振興財団
印　　刷　中部印刷株式会社